

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 87号」

<http://jkoga.com/>

平成三十一年三月
第八十七号

< 2019年3月 >

古賀 順子

「ナンシー派アール・ヌーヴォー」

パリ東駅からTGVに乗って1時間50分、ナンシー「スタニスラス広場」に到着。朝日を浴びるカフェで朝食を取り、広場に面した「ナンシー美術館」に入る。ナンシーの建築家ジャン・プルーヴェ(1901-1984)特別展示室を抜けて、地下1F「ドーム・コレクション」が目当てである。

アール・ヌーヴォーのガラス工芸を代表するドーム兄弟(アントナン・ドーム 1864-1930)(オーギュスト・ドーム 1853-1909)の花瓶、ランプ、グラスなどが展示されている。

19世紀末に生まれたアール・ヌーヴォーは、草木、花、昆虫、鳥など自然界にインスピレーションを得た新しい曲線の装飾芸術で、ナンシーで特異な発展を遂げる。ドーム兄弟を始め、ナンシー生まれのエミール・ガレ(1846-1904)、ヴィクトール・プルーヴェ(1858-1943)、ルイ・マジョレル(1859-1926)らによって推進されたこの新しい美学は「ナンシー派」と名付けられエミール・ガレが初代代表となる。「地方産業とアートの融合」を掲げているように、工業生産によりコストを抑え、アートを人々の手の届く存在にすることを目指していた。台頭する富裕層の要求に応えるため、日常の生活用品、調度品、家具、照明などのトータルインテリア装飾を実現したのがアール・ヌーヴォーである。1900年「ナンシー派」が誕生したのも偶然ではない。

1870年晋仏戦争に負けたフランスは、アルザス地方とモーゼル地方の一部をプロシヤに併合される。フランス国内に留まりたいと願うアルザスやモーゼル地方の人々がナンシーに移り住み、工業を支える資金や技術をもたらし、ナンシー派芸術家たちの装飾工芸発展の原動力となったのである。

同時に、多くの展覧会が開催され、1890年代にはナンシーがフランスのアール・ヌーヴォー中心地となり、

現代装飾芸術をリードする存在になる。街を歩くと、アール・ヌーヴォー様式の窓やベランダ、建物が多いことに気がつく。マジョレル邸はその代表だが、現在は修復中で見学はできない。そのナンシー派の繁栄を今に伝えているのが「ナンシー派美術館」(38, rue Sergent Blandant, 54000 Nancy)である。家族経営の小さな商店をチェーン百貨店に拡大拡張したナンシーの実業家ユージェヌ・コルバン(1867-1952)は、新しい時代の新しい装飾芸術を掲げるアール・ヌーヴォーの芸術家たちのメセナ兼コレクターとなる。彼の住まいが市に寄付され、ナンシー派美術館になっている。家具、ガラス製品、陶器、皮工芸、織物などアール・ヌーヴォー様式の室内が再現されているが、その中でも注目したいのが、ランプとスタンドグラス。1900年頃には一般家庭で電気が使用されるようになる。街灯はガスから電気に代わり、家庭内でも自然光ではない電気による照明が一般化する。この変化にいち早く反応したエミール・ガレは、ランプを工業生産化する。電気照明を考慮した室内スタンドグラスも新しさを好む富裕層に歓迎され、ジャック・グリユベール(1870-1943)らの作品が愛されたのである。

こうして一気に開花したナンシー派アール・ヌーヴォーは、1909年「フランス東部国際工芸展」を開催し、ナンシーやロレーヌ地方の優位性を誇示しようとしたが、パリやドイツとの競合に圧され、1914年「ナンシー派」は解散に至る。

極めて特殊な社会情勢の中で生まれ、14年の短い期間で幕を閉じた「ナンシー派」。その運命を象徴するかのようなエミール・ガレ作「フランス・バラの花瓶」がとても綺麗だと思った。1901年の作品で、蕾から花びらが散るまでのバラの一生がモチーフである。俗称フランス・バラと呼ばれる品種で、メッス(フランス)にしか咲かないとされる。メッスはドイツに併合されていた時で、フランスへの愛国の思いが込められている。ナンシーの園芸会社で23年務めた社長に贈呈するためにエミール・ガレに注文が出された花瓶である。